

醍醐帝貫之躬  
恒の歌を徴し  
給ふ

ものならば、この白女が歌なり。又鳥飼の院にたはしましたるに、例の遊女アソビメもあまたまゐりたるなかに、大江の玉淵が女のこゑよくかたちをかしけなれば、あはれがらせたまひて、上ウにめしあけて「玉淵はいと勢ありて、歌などいよいよみき。このとりかひといふ題を、人々のよむに、同じ心につかうまつりたらば、まことの玉淵が子とはおほしめさん」とれはせ給ふ。うけたまはりてすなはち、

ふかみどりかひある春にあふときは、霞をらねど立ちのほりけり、

なごめでたがりて、帝よりはじめ奉りて、ものかつけたまふほどのこと、南院ミナミノイノの七ナナ郎君チカラキミにうしろむべき事などおほせられけるほどなど、くはしうぞかたる「延喜の

御時に古今撰キミコノイハせられしをり、貫之はさらなり、忠岑や躬恒などは御書所にめされ候ひけるほどに、四月二日なりしかは、またしのびねのころにて、いみじう興じたはします。貫之めしいで、歌つかうまつらしめ給へり。

ことなつはいかゞなきけん郭公、このよひばかりあやしきぞなき、

それをたにけやけき事に思ひ給へしに、たなじ御時に、御あそびありし夜、御まへ

の御階のもとに躬恒をめして、月をゆみはりといふ意は、なれのころぞ、これがよしつかうまつれ」とれはせことありしかは、

てる月をゆみはりとしもいふ事、山邊をさしていはなりけり、

と申したるを、いみじう感ぜさせ給ひて、おほうちき給りて、肩にうちかくるまゝに、

白雲のこのかたにしもたりあるは、あまつ風こそふきてまぬらし、

いみじかりしものかな、さばかりのものを近くめしよせて、勅祿たまはずべき事ならね、とそり申す人のなきも、君のれもくたはしまし、又躬恒が和歌の道にゆるされたるこそそれもひ給へしか。かの遊女アソビメも、この歌よみ感じ給へるはさを侍る。院にやらせ給ひ、都はなれたる所なればといふこそ、あまりにたやすけたれ。この侍とふ、圓融院の紫野の子の日、曾根好忠いかに侍りけることぞ、といへば、「それ、いとけうに侍りし事なり。さばかりの事に上下をえらばせ、和歌を賞せさせ給はん事、けにいらまほしき事に侍れど、かくろへて優なる歌をよ

圓融院曾根好  
忠を斥け給ふ

三條院の御祝  
の出車

みいたさんたにいと無禮に侍るべき。ことに座にたゞつきにつきたりし、あさましく侍りし事ぞかし。小野宮殿、閑院大將殿朝光などぞかし、ひきたてよ、ひきたてよ、とおきてさせ給ひしは、躬恒が別祿たまはるにたとしへなき歌よみなりかし。歌いみじくとも、をりふしきりめを見てつかうまつるべきなり。けしうはあらぬ歌よみなれど、からうおとりにし事ぞかし」といふ。侍こまやかけうちゑみて、古のいみじき事どもの侍りけんはしらす、某ものおほえて後ふしぎなりしことは、三條院の大嘗會の御祝の出し車、大宮、皇太后宮上東門院より奉らせ給へりしぞありしや。大宮の一の車のくちのまゆに、香囊かけられて、そらたき物たかれたりしかば、二條の大路のつおとけふりみちたりしさまこそめでたく、今にさはかりの見物またなしなさいへば、世繼しかゝいしかばかり御心にいれていそみさせたまへりしかは、それに女房の御心のたはけなさは、さはかりの事をすたれおろして、わたり給ひにしはとよ、あさましかりし事ぞかしな。ものけたまはるくちののるべしとおもはれけるが、しりにたしくたされ給へりけるところうけたまはりしか。けに女

一品の宮の御  
装束

房のからきことにせらるなれども、しうのたはしめさん所もいらす、男はえしかあるまじくこそ侍れ。たはかたその宮には、心おどろましき人のたはするにや。一品讀子の宮の御装束に、入道殿より、玉をつらぬきいははをたて、水をやり、えもいはす調せさせ給へる裳唐衣を、まづ奉らせ給ひて、中にもとりわきてたはしめさん人にたまはせよ、と申させ給へりけるを、さりとともと思ひなくたまへりける女房の給はらで、やがてそのなけきにやまひづきて、七日といふにうせ給ひにけるを、なさいとさまでたはえ給ひけんつみふかく、ましていかは物妬みの心ふかくいましけん。なさいふに、あさましくいかでかくよろずの事、御簾のうちまを聞くらんとおそろし。かやうなる女翁などのふることをするは、いとうるさく、さかまうさやうにこそおほゆるに、是はたゞ昔にたちかへりあひたるこくちして、又々もいへかし、さしいらへごと問はまほしき事多く、心もとなきに、講師おはしましにたりと、たちさわぎのくしりしほどに、かきさましてしかは、いとくちをしく、ことばでなんに、心つけて家はいつごとと見せんとれもひしも、講のなからばかりがほど

に、その事となく、ごよみとて、かいのくしりいできて、るこみたりつる人もみなく  
づれ出づる程に、まぎれていづれともなく見えきはしてしくちをしさこそ、何  
事よりもかの夢のまかまほしさに、あるところもたづねさせんとし侍りしかども、  
ひとりくをたにえみつけずなりにしよ』  
まことく御門の母後の御もとに行幸せさせ給ひて、御興よする事は、仁明帝深草の御  
時よりありける事とこそ、それがさきはありてのらせ給ひけるを、高麗子後の宮行幸の  
ありさま見奉らん、たゞよせてたてまつれど、申させ給ひければ、そのたびさてれ  
はしましけるより、今はよせてのらせ給ふとぞ。

定校 大鏡下卷 終

此段後人の加  
筆無用のもの  
なれども流布  
本に載せたり  
は始くこゝに  
附けおくなり

中院源雅定公  
皇后宮の大夫殿かきつがれたる夢なり、此とせしころきけば、百日千日の講おこなはぬ家々なし、老いたる  
も若きも後の世のつとめをのみおぼし申すあるに、一日の講もおこなはず、たゞつらくといたづらに  
かさよしてのみはへる罪ふかさには、ある處の千日の講師の時になんおこなふとまてえてまゐりたりける  
に、人々處もなく、車もかちの人もありけん、やゝまてと講師見えず、人々のいふをきけば、けふのこうはゆ  
ふつかたずあらんなどいふに、かへらんもつみえがましくおもふに、百とせばかりにやあらむとみゆる  
かさなのわたるかたはらに、法師のおなじほどにみゆる人の中をわけてきて、このかさなにいとかして  
く見奉りつけて、あながちにまゐりつるなり、そもくおまへはひとくせ世つぎの菩提講にて、ものがた  
りしたまひしに、あながちにまゐりて、あどうち給ひしと見たてまつるは、かゝ法師のひがめかどいへ  
ば、そとこ、さもや侍りけんといふ、これはいでけうありて、その世つぎにはまたやあひたまへりし、とい  
へば、後三條院生れさせ給ひてなん、あひて侍りしといへば、まてくいかなる事か申されけん、そのかみ  
ころも、見さまもあよばず、うけたまはり思ふたまへし、そのうちさまく興ある事も侍るを、さかせ給ひ  
けん、まことにいまの世の事とてへての給はせよ、おはれいんとせにならせたまひ侍りぬらんといへ  
ば、二のまひのおきなにてこそは侍らめ、おはれとさかんとおぼしめせば、すこぶる申し侍らん、まづ  
その年萬壽二年さのどの丑のとし、今年つちのどの亥のとしとや申す、八十二年にこそなりにて侍りけ  
れ、いでや何ばかり見さしたる事のなまげも侍らず、かの世つぎの申されしこともみくにどいまるやう

にも侍らざりきと云へば法師にてくさりとて八十二年の功德のほやしとはけふの講を申すべきな  
めり、いまでもむかしもしかり侍りし、二のまひのおきなものをまねびのおきな僧らが申さん事を、正教に  
ならずらへてたれもさこしめせ、といへば、おきなをさこしめしとて、侍るまじけれど、かくせちにす  
め給へば、今はのさきみにをこのものにわらはれ奉るべきにこそ、見き、侍りしは、後一條院長元九年四  
月十七日うせさせたまへる、天下をしろしめす事二十一年、そのほどいらなくかなしきことおほく侍り  
き、中宮はやがてればしめしなげきて、おなじとしの九月六日うせさせ給ひにし、上東門院おぼしめしな  
げさしかど、これにもふくれ奉らせ給ひて、一品の宮さまの齋院をこそはかしづき奉らせたまひしか、  
院のおはん送葬の夜すかし、ひたちの國の百姓とかや、

かけまくもかしこき君が雲の上に、煙かゝらんものどやはみし、

五月ばかりはとゞきすをさこしめして、女院上東門院

ひとことを君につげなん郭公、このさみだればやみにまごふと、

このおはんれもひに、源中納言顯基の君出家し給ひて後、女院に申給へりし、

身をすて、やぞを出でにし身なれども、尙戀しきは昔なりけり、

御かへし

時のまも戀しき事のなくさまば、世はふたゝびもそむかれなまし、

そのときは、かやうなる事多くさこえ侍りしかど、かすかす申すべきならず、後朱雀院位につかせ給うて、  
さはいへどはなやかにめでたく世にもてなされて、しばしこそあれ、一の宮のかたにゐさせたまふ一品  
宮、后に立たせたまふ、後三條院生れさせ給ひにし、かば、さればこそむかしの夢はむなしかりけりや、な  
からん末つたへさせ給ふべき君におはしますとて、世つぎ申されし、いさ、后弘徽殿におはし、東宮後冷泉  
うめつばにおはしまして、先帝の一品のみや、春宮にまゐらせ給ひて、ふちつばにおはしまして、女院後冷泉ら  
せ給ひてひとつにおはしたてまつらせ給へる宮たち、いづれどもおぼつかならず見たてまつらせ給  
ふめでたさに、故院のおはし、まなげき、つさせすおぼしめしたりけり、關白殿にやしなひたてまつら  
せたまひし故式部卿の宮の姫君うち、まゐらせ給ひて、弘徽殿におはしますとて、かねて後冷泉の  
みやいさせたまひしこそ、いかにやすからずおぼしめすらんと、世の人なやみ申ししか、あすまかた  
せ給はんとして、うへにのぼらせ給ひて、みかどいかり申させたまひけん宮後冷泉  
今はたゞ雲井の月をながめつゝ、めぐりあふべきはせせしられず、  
此宮に女宮ふたところおはします、齋院にゐさせ給うて、いとつれづれにみやたち戀しく、よめする  
まじくおぼしめすに、五月五日にうちより、  
もろどもにかけしあやめのねをたえて、さらにこひぢにまごふ頃かな  
御かへし

新古今四 陽明門院

かた／＼にひさむかれつゝあやめぐさぬねをやはかけんと思ひし。  
頼朝 どの御もてなしかたはらいたくむづらはしくて、ひさしくいらせ給はず。なれどこのみやかはしませ  
中宮御子 こそは、たのもしき事なれど、いそのみやにぞどこみこうみ奉り給ひては、うたがひなきまうけの君とれ  
皇后御子宮二 ぼしめしたる、ことわりなり。よき女房おはく、出羽少將、小辨、小侍従などいひて、手かき歌よみなど、はな  
やかにてらみじうてとふらはせ給ふ。

明治三十年九月十日印刷  
明治三十年九月十五日發行

版權所有

編纂者	東京市麹町區飯田町三丁目廿五番地 萩野由之
編纂者	東京市牛込區佐内町三十番地 松井簡治
發行者	東京市神田區三崎町貳丁目一番地 渡邊兵吉
印刷者	東京市神田區錦町三丁目二十五番地 熊田宜遜
印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地 熊田活版所
發行所	東京市神田區三崎町貳丁目 六合
發賣所	東京市日本橋區通三丁目六番地 林平次郎

108  
合 2  
44

